

Title	きょうだい関係におよぼす母親の在・不在の影響
Author(s)	志澤, 康弘; 安田, 純; 日野林, 俊彦; 南, 徹弘
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 33 P.163-P.180
Issue Date	2007-03
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/7601
DOI	10.18910/7601
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

きょうだい関係におよぼす母親の在・不在の影響

志 澤 康 弘
安 田 俊 純
日野林 俊 彦
南 徹 弘

目 次
はじめに
1. 方法
2. 結果
3. 考察

きょうだい関係におよぼす母親の在・不在の影響

志澤 康弘
安田 純
日野林俊彦
南 徹弘

はじめに

母親は短期的にも長期的にもきょうだい関係をより親密にする (Howe, Aquan-Assee, & Bukowski, 2001; 小島, 1996; Kojima, 2000)。一方で、母親との分離場面や見ず知らずの大人との対面状況の中で、年長児が年少児の不安を取り除くことを目的とした世話行動を示すことがわかっている (Stewart, 1983)。また、年長男児は年少児の要求に合うように世話をするのに対し、年長女児は年少児の要求以上の世話をすることが示されている (Stewart, 1983; Stewart & Marvin, 1984)。

このように、母親が在席している場面と母親が在席しない場面ではきょうだいの互いに対する関わりかけに違いが見られることは、多くの研究者によって示されているが、その結果は一貫していない。母親が在席していない場面と比較して、母親が在席している場面ではきょうだいの肯定的な関わりあいや向社会的な行動が多く (Howe, Bukowshi, & Aquan-Assee, 1997; Musun-Miller, 1991)、お互いに否定的な内容で関わりかけることが少ないという結果が報告されている (Dubrow & Howe, 1999; Howe et al., 1997; Howe, Fiorentino, & Gariépy, 2003; Musun-Miller, 1991)。一方で、母親が在席している場面では肯定的な関わりかけや向社会的行動が少なくなり (Corter, Abramovitch, & Pepler, 1983; Dubrow & Howe, 1999; Jones & Adamson, 1987)、否定的な関わりが増える (Corter et al., 1983; Corter, Pepler, & Abramovitch, 1982)。もしくは、母親が在席している場面では、きょうだいの関わりあいが全体的に抑制される (Corter et al., 1983; Dubrow & Howe, 1999) という研究もある。

母親の在席がきょうだい関係におよぼす影響については研究によって異なる結果が得られているが、先にも簡単に触れたように、きょうだい関係には、年齢 (Hoff-Ginsberg & Krunger, 1991)、出生順位 (Bigner, 1974; Brody, Stoneman, & MacKinnon, 1982; Brody, Stoneman, MacKinnon, & MacKinnon, 1985; Cicirelli, 1976; Farver & Wimbarti, 1995; Minnet, Vandell, & Santrock, 1983; Pepler, Abramovitch, & Corter, 1981)、きょうだい構成 (Abramovitch, Corter, & Lando, 1979; Abramovitch,

Corter, & Pepler, 1980; Abramovitch, Corter, Pepler, & Stanhope, 1986; Berndt & Bulleit, 1985; Cicirelli, 1972; Lamb, 1978a, b; Minnet et al., 1983; Pepler et al., 1981; Stoneman, Brody, & MacKinnon, 1986)、きょうだいの年齢差 (Corter, Pepler, & Abramovitch, 1982; Furman & Buhrmester, 1985; Vandell & Wilson, 1987) などさまざまな要因が影響をおよぼすことが知られている。

こうしたことから、北川 (2004) は母親の在席場面と不在場面のきょうだいの否定的関わりかけと肯定的関わりかけを従属変数にして、年齢を共変量、性別と出生順位を独立変数とした共分散分析をおこなったが、母親の在・不在がきょうだい関係に与える影響について明確な結論を導けなかった。その理由として北川 (2004) の研究では母親にきょうだいに対して積極的に関わりかけを行わないよう教示したという他に、単にデータ数が少なかった、そもそも母親の在・不在の影響は一定の傾向がないなどが考えられる。また、こうした一般的にありそうな理由の他に、母親が在席することと不在なことがきょうだい関係に与える影響は年齢や性によって複雑に変化する (より具体的には直線的な関係が成り立たない) のかもしれない。そこで本研究では北川 (2004) のデータを用いて母親が在席することと不在なことがきょうだい関係に与える影響が、年齢や性によってどのように変化するかを、北川 (2004) が行ったような体系的な分析ではなくより探索的に調べることを目的とした。

1 方法

観察に用いたデータは北川 (2004) によるものである。

1.1 観察対象

対象家庭

対象家庭は、少なくとも2人の子どもがおり、かつ年少の子どもが幼児であることを条件とした。ここでいう幼児とは、歩行が始まり、言葉をしゃべることができるようになる1歳すぎから小学校に入学するころまでの時期にある子どもを指す (日野林, 1995)。この条件に合う18家庭に協力を依頼し、同意書が得られた17家庭を本研究の対象家庭とした。

観察対象児

観察対象児は、17の対象家庭についてそれぞれ2名1組のきょうだいであった。対象家庭17家庭のうち、2人きょうだいの家庭が13家庭であり、3人きょうだいの家庭が4家庭であった。3人きょうだいの4家庭に関しては、3人の子どものうち2名を観察対象児とした。きょうだい構成は、姉と妹が4組、姉と弟が4組、兄と妹が5組、兄と弟が4組であった (表1)。

表 1 対象児の性と年齢の構成

番号	性別 (年長児 年少児)	年齢		年齢の 平均	年齢の 差
		年長児	年少児		
1	♀♀	9.3	3.2	6.3	6.2
2	♀♀	4.4	1.4	2.9	3.0
3	♀♀	6.1	3.8	5.0	2.3
4	♀♀	5.3	3.6	4.5	1.7
5	♀♂	8.8	5.3	7.1	3.4
6	♀♂	6.0	2.0	4.0	4.0
7	♀♂	6.7	2.2	4.5	4.5
8	♀♂	9.0	5.3	7.2	3.8
9	♂♀	6.3	4.3	5.3	2.0
10	♂♀	9.3	4.6	7.0	4.7
11	♂♀	8.3	5.3	6.8	3.0
12	♂♀	4.3	1.4	2.9	2.8
13	♂♀	6.1	4.3	5.2	1.8
14	♂♂	8.3	5.1	6.7	3.3
15	♂♂	7.7	5.3	6.5	2.4
16	♂♂	9.0	6.3	7.7	2.7
17	♂♂	5.1	2.8	4.0	2.3

年長児の平均年齢は 7.1 歳（範囲：4.3-9.3 歳）、年少児の平均年齢は 3.9 歳（範囲：1.4-6.3 歳）、きょうだい間の年齢差は 3.2 歳（範囲 1.7-6.2 歳）であった。年齢についてきょうだい構成による差はあるとは言えなかった（分散分析、年長児の年齢： $F_{(3,13)} = 0.47$ 、年少児の年齢： $F_{(3,13)} = 1.07$ 、年長児の年齢： $F_{(3,13)} = 0.89$ 、いずれも n.s.）。

1.2 手続き

家庭訪問

家庭訪問は、電話連絡により、母親、年長児、年少児の都合の良い日時を尋ね、子どもに午睡の習慣がある場合にはその時間帯を避けて行った。対象家庭の都合などにより、予定していた訪問日を後日に延期する場合もあった。家庭訪問は観察者 1 名（北川）が行い、1 家庭に対する家庭訪問の時間は約 1 時間であった。

観察手続き

本研究の観察と VTR 撮影は、子どもたちが日常よく遊んでいる子どもたちの自宅の部屋で行った。母親から研究協力に対する同意書に署名をもらったうえで、観

察について説明した。その後、母親在場面、母親不在場面のそれぞれにおいて、20分間ずつ観察者が持参したブロック(カワダ社 GDI-01)で自由に遊んでもらった。分析には、母親在場面、母親不在場面それぞれ 20 分の撮影時間のうち、最初の 5 分を除いた 15 分を用いた。

母親在場面においては、子どもたちの質問や勧誘に対して最小限の対応のみを行い、母親の方から子どもたちに対して積極的には関わりかけないよう母親に依頼した。また、母親在場面が先の場合には、不在場面への転換のために部屋から退出する際、子どもたちに対して、「お母さんは他の部屋に行っているけど 2 人はこのままここで遊んでいてね」などの言葉かけをするよう依頼した。母親の在・不在の観察順は同じきよう構成内で偏りが生じないようにカウンターバランスを取った。

母親在・不在場面の観察は、子どもたちから約 2m 離れた位置に設置したデジタルビデオカメラ (SONY 社 DCR-TRV22) で撮影した。観察者は、設置されたビデオカメラの横あるいは約 2m 離れた位置に座り、ノートにメモなどを取った。観察者は、可能な限り観察対象児と相互交渉を持たないように心がけたが、観察対象児の方から観察者へ関わりかけがあった場合には、不自然にならない程度に対応した。全対象家庭に対する総観察時間は 680 分であった。

観察期間

家庭訪問および観察は、2003 年 9 月の、8 日から 19 日の間に行われた。観察は 1 家庭につき 1 日であり、月曜日から金曜日までの平日の午後に行われた。また、総観察日数は 6 日であった。

1.3 分析方法

行動カテゴリー

行動カテゴリーは Abramovitch et al. (1979) に撮影したビデオテープの内容と照らし合わせて修正を加えて利用した。「否定的な関わりかけ」として、命令、からかい、物を介した攻撃、身体攻撃、脅かし、その他(敵対的行動)の各カテゴリー、「肯定的な関わりかけ」として、共有、協力、要求、賞賛、励まし、肯定的身体接触、笑顔、その他(向社会的行動)の各カテゴリーであった(表 2)。

表 2 行動カテゴリー

カテゴリー	定義
Agonistic-Behaviors (敵対的行動)	
身体攻撃	叩く、殴る、引っ張る、押す、蹴る、咬む、つねる、物を投げつけるなど、相手に対して身体的危害を加えるような行動。
物を介した攻撃	物を奪う、壊すなどの物に対する否定的行動。
命令	自分の欲求を満たすために、大きな声を出したり、怖い顔をしたりにして、相手に何かをするように言いつけること。
脅し	危害を加える、物を奪う、壊すなどの意図を言葉を用いて示すこと。
からかい	いじめる、悪口を言う、相手の行動や判断に対して不満を示すなどの、相手を否定するような言語行動。
その他(敵対的行動)	身体攻撃、物を介した攻撃、命令、脅し、からかいに含まれないような敵対的行動。
Prosocial-Behaviors (向社会的行動)	
共有	自発的あるいは相手からの要求に従って、相手に物を与えたり、自分が所有している物を相手と共有したりすること。
協力	説明や身体的な援助など、2人を必要とするような行動をすること。
要求	物や援助などを、丁寧な態度で依頼すること。
賞賛	きょうだいやきょうだいの行動に対して賛成したり、賞賛したりする意図を言語的に示すこと。
励まし	きょうだいが苦しんでいるときに、言語的あるいは身体的に慰めること。
肯定的身体接触	抱きしめる、手を握る、撫でるなどの相手に対して好意を示すような身体接触。
笑顔	笑ったり微笑んだりを表情として顔に表すこと。
その他(向社会的行動)	共有、協力、要求、賞賛、励まし、肯定的身体接触、笑顔に含まれないような向社会的行動。

記録の方式

各行動カテゴリーについては連続記録(マーティン & ベイトソン, 1990)を用いた。すなわち、それぞれの行動の内容に加え、その行動の開始時間と終了時間、さらにその行動を行った児(年長児か年少児)を記録した。

分析方法

統計処理のうち、因子分析についてはSPSS統計パッケージ ver. 12 (SPSS社)を用いた。有意水準は5%とした。また、探索的に分析を行ったので、いずれの検定も両側検定である。

2 結果

2.1 因子分析による変数のまとめと吟味

分析をはじめるとあって、まずは各行動カテゴリーが「否定的な関わりかけ」と「肯定的な関わりかけ」をうまく反映しているか、さらに変数をまとめることを目的として因子分析(主因子法)をおこなった。各対象児のデータは母親在席の条

件と、母親不在の条件で別なデータとして扱い(因子分析の計算上異なる標本として扱い)、因子分析の際に個体差をよく説明するだけではなく、母親の在・不在の条件もよく説明する変数を抽出できるようにした。分析に利用したカテゴリーは「否定的な関わりかけ」と「肯定的な関わりかけ」の2つに大別されるため、因子の数は2と仮定した。

固有値

因子分析の初期の固有値をスクリープロットしたところ(図1)、固有値が突出して大きい2つの因子が見られた。したがって、因子の数を2と仮定したことは妥当であると言える。そこで、因子の数を2としてプロマックス回転を行った。

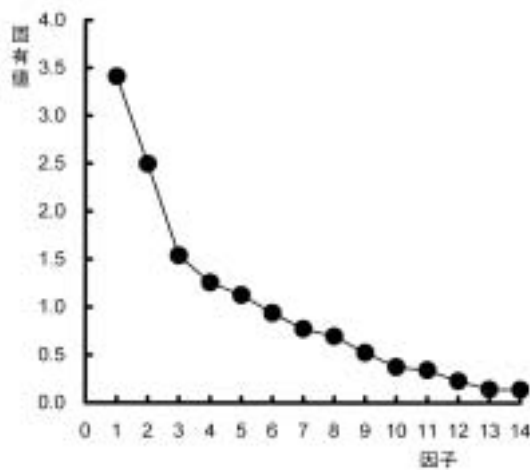


図1 固有値のスクリープロット

因子パターン

得られた2つの因子のうち、第1因子の因子負荷量の絶対値が大きい(絶対値が0.3以上)カテゴリーは順に、“からかい”、“脅し”、“身体攻撃”、“命令”、“その他(敵対的行動)”であり、「否定的な関わりかけ」として採用したカテゴリーのうち、“物を介した攻撃”を除いて全て網羅されており、「否定的な関わりかけ」を表すと考えてよいと見なせる(図2)。

第2因子の因子負荷量の絶対値が大きいカテゴリーは順に、“協力”、“その他(向社会的行動)”、“賞賛”、“要求”であり、「肯定的な関わりかけ」として採用したカテゴリーのうち、向社会的行動に関係するカテゴリーであった。このため、第2因子は「向社会的関わりかけ」に関連する因子と考えられる。

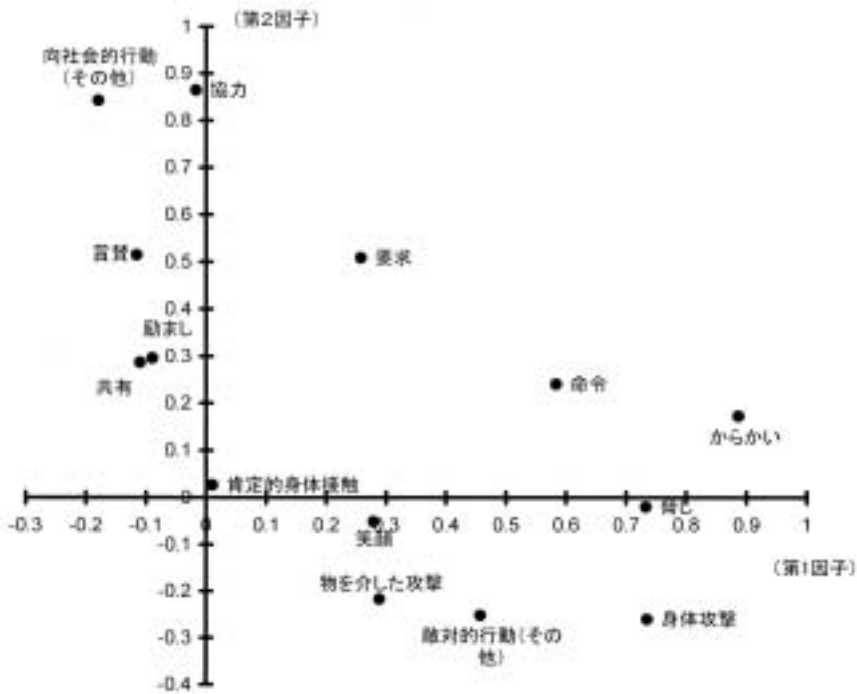


図2 因子パターン

2.2 母親の在席と不在がきょうだい関係におよぼす影響の全体的傾向

きょうだいそれぞれに与える母親席と不在の影響を把握するために、それぞれのきょうだいに対して推定された因子得点を吟味した。全体的な傾向として、母親不在場面と比較して母親在場面で第1因子、第2因子共に絶対値が小さい値を示しているように見えたが（すなわち、母親在場面で「否定的な関わりかけ」も「向社会的な関わりかけ」も共に抑制されているように見えたが）、第1因子、第2因子共に母親在席場面と不在場面での差は有意ではなかった（図3、対応のある t 検定、第1因子： $t_{(33)}=0.002$ 、n.s.、第2因子： $t_{(33)}=1.841$ 、n.s.）。この傾向は年長児と年少児に分けて分析しても同じであった（対応のある t 検定、年長児・要因1： $t_{(16)}=0.069$ 、n.s.、年長児・要因2： $t_{(16)}=0.730$ 、n.s.、年少児・要因1： $t_{(16)}=-0.097$ 、n.s.、年少児・要因2： $t_{(16)}=1.653$ 、n.s.）。

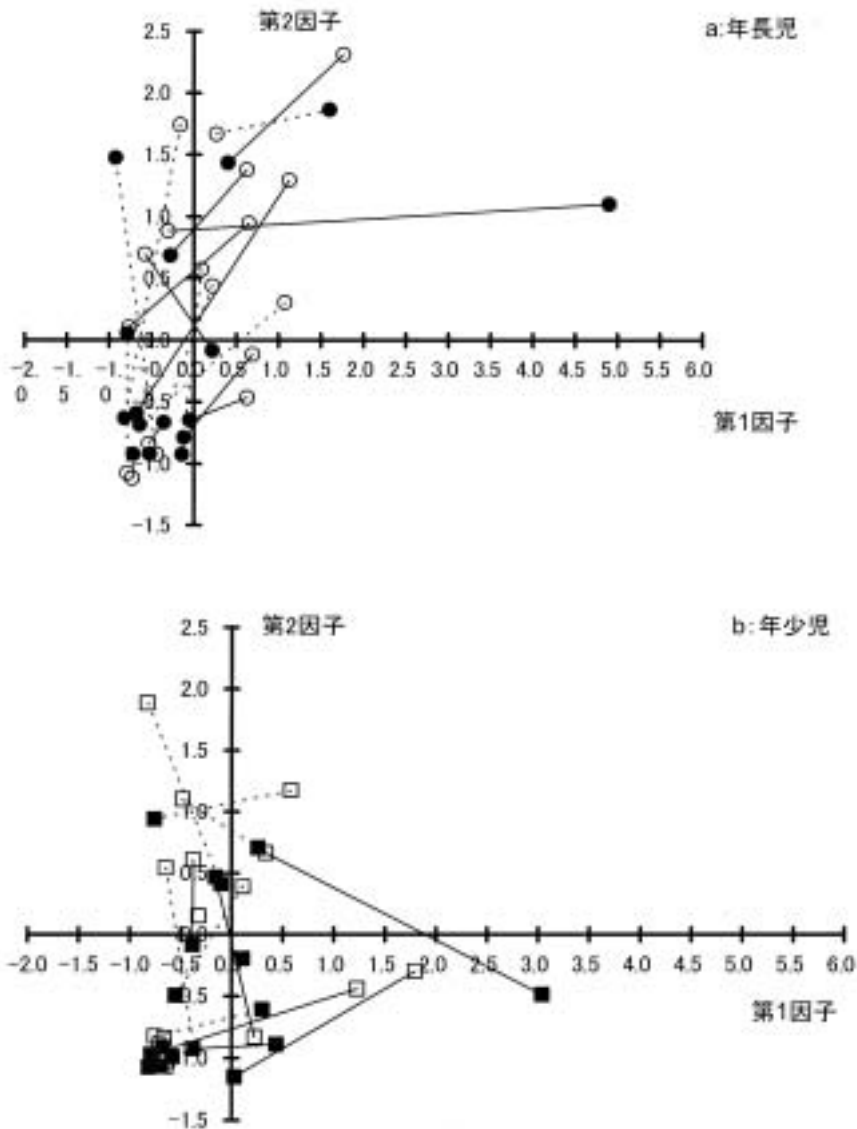


図3 推定された因子得点 個々の値は対象児1人を表す。a: 年長児、b: 年少児。
白抜き: 母親不在場面、黒: 母親在場面。直線: 男性、破線: 女性

2.3 母親の在・不在がきょうだい関係におよぼす影響の年齢と性別における検討

母親の在場面と不在場面で「否定的な関わりかけ」と「向社会的関わりかけ」の量が変化するのはどのような属性(性、年齢)を持つ児なのかを調べるために、それぞれのきょうだいごとの第1因子と第2因子のそれぞれを母親在場面の値から母親不在場面の値を引いた値を計算した。この値が正の値の場合は母親が在席してい

る場面で「否定的な関わりかけ」（第2因子の場合は「向社会的関わりかけ」）が相対的に多いことを示し、負の値の場合は母親が不在の場面で「否定的な関わりかけ」が相対的に多いことを示す。

年齢の影響

幼児の頃は母親在場面では攻撃的で、児童期になると母親が在場面（見ている場面）では攻撃が減少するなどといったように、母親の在・不在の影響は年齢による影響を受けるのかもしれない。しかしながら、年齢が高くなるにつれ「否定的な関わりかけ」が多いとか「向社会的関わりかけ」が多いとかいった傾向はなかった（図4、図5、第1因子： $n = 34, r^2 = 0.000, n.s.$ 、第2因子： $n = 34, r^2 = 0.001, n.s.$ ）。

ただし、1歳から2歳程度では、母親の在・不在はきょうだい関係にほとんど影響を与えず、年齢が高くなるにつれて母親在場面と母親不在場面での差が大きくなる傾向があるようである。検定の結果、第2因子：「向社会的関わりかけ」のみにあって、年齢が高くなるにつれ母親在場面と母親不在場面との差が大きくなる（差の絶対値が大きくなる）傾向が見られた（第1因子： $n = 34, r^2 = 0.036, n.s.$ 、第2因子： $n = 34, r^2 = 0.125, p < 0.05$ ）。

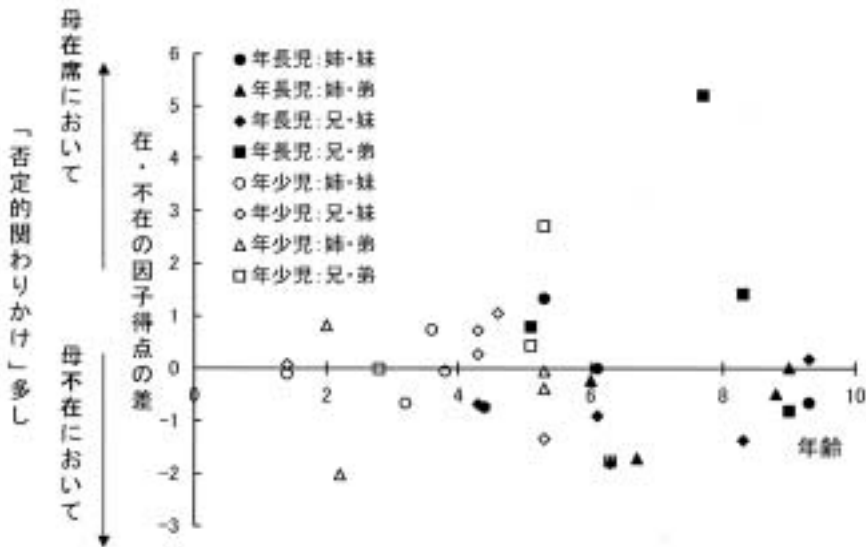


図4 年齢からみた推定された因子得点（第1因子）

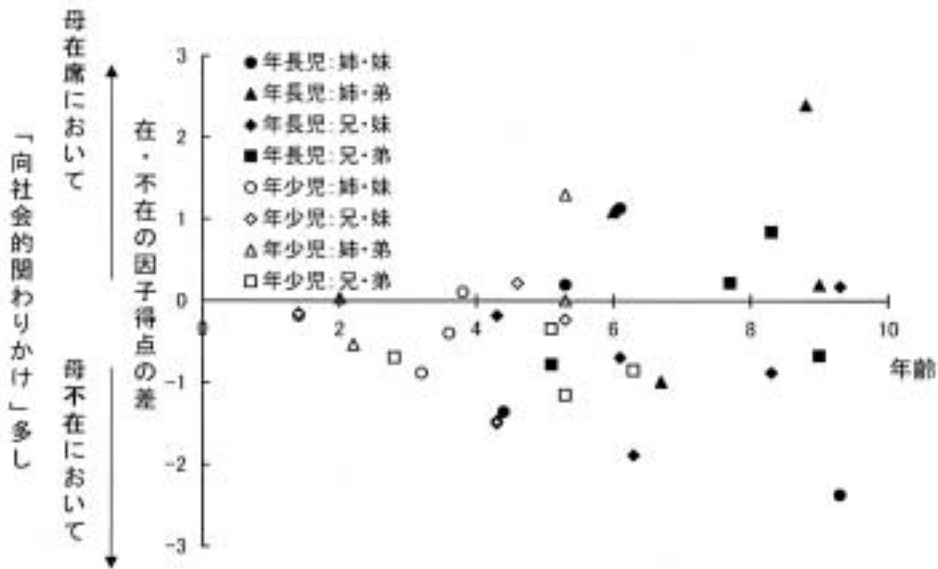


図5 年齢からみた推定された因子得点(第2因子)

年長児と年少児の比較

第1因子、第2因子ともに年長児と年少児の値について明らかに差は見られなかった(等分散を仮定した t 検定、第1因子: $t_{(32)} = -0.112$, n.s.、第2因子: $t_{(32)} = -0.555$, n.s.)。

年齢差の影響

年齢の差についてもほぼ同様の分析を行った。しかしながらいずれも有意でなかった(図6、図7、第1因子: $n = 34$, $r^2 = 0.000$, n.s.、第2因子: $n = 34$, $r^2 = 0.000$, n.s.)。ただし、第2因子: 「向社会的関わりかけ」については、きょうだいの年齢差が3.0~4.5歳の場合に母親在場面で「向社会的関わりかけ」が増えているように見える。モデルを多項式モデル ($y = b_0 + b_1x^2 + b_2x$) に変更したところ有意な結果が得られた ($F_{(1,32)} = 11.567$, $p < 0.05$)。すなわち、きょうだいの年齢差があまりないとき、あるいは非常に離れている場合はきょうだいは母親不在場面で「向社会的関わりかけ」が多くなり、年齢の差が3.0~4.5歳の間である場合は母親在場面で「向社会的関わりかけ」が多くなることが示された。

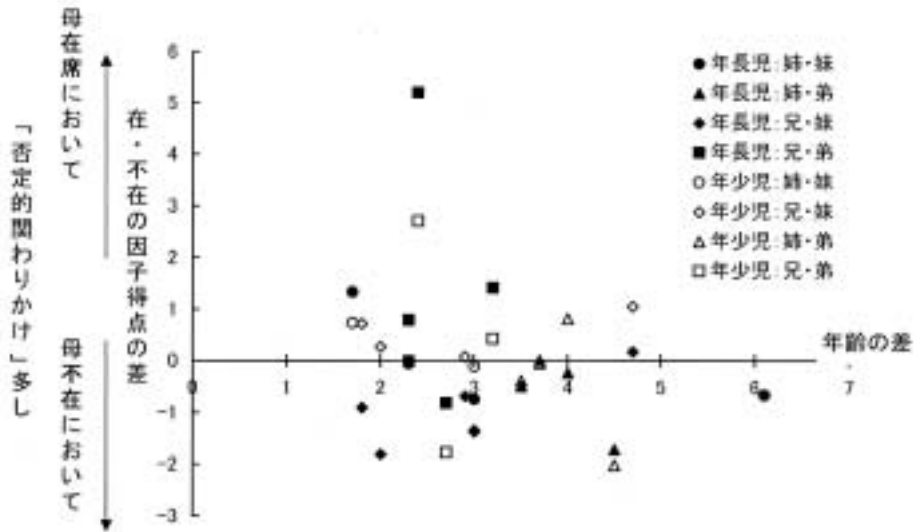


図6 年齢からみた推定された因子得点(第1因子)

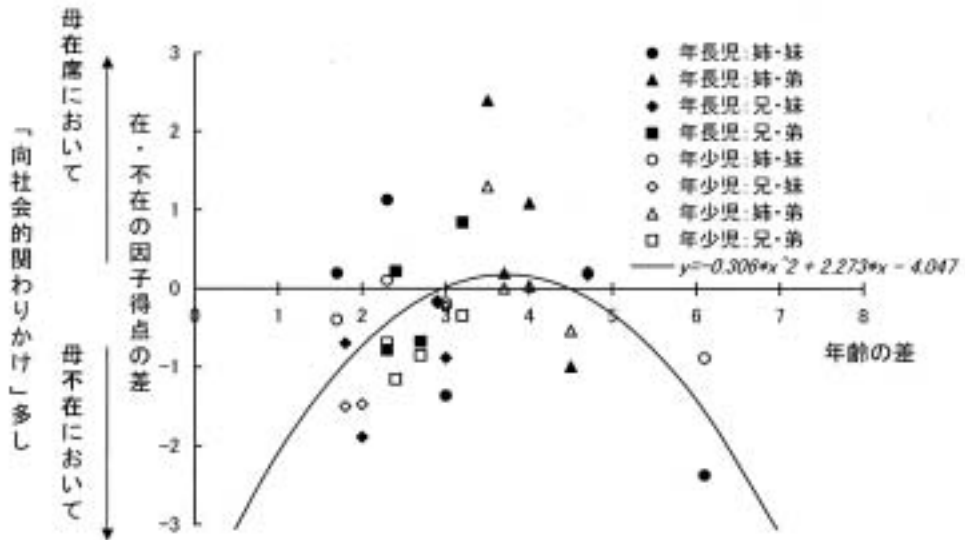


図7 年齢からみた推定された因子得点(第2因子)

性別ときょうだい構成の影響

年齢、年齢差と同様、第1因子および第2因子の母親在场と母親不在場面の差が、性別あるいはきょうだい構成によって影響を受けるかを調べるために、「姉と妹ペアの姉」、「姉と妹ペアの妹」、「姉と弟ペアの姉」、「姉と弟ペアの弟」、・・・

といった性別ときょうだい構成について第1因子、第2因子を従属変数として分散分析を行った(すなわち、図4、5、6、7の得点を従属変数、凡例に示された分類を独立変数として分析を行った)。しかしながら性別ときょうだい構成(第1因子： $F_{(7,26)} = 1.466$, n.s.、第2因子： $F_{(7,26)} = 1.210$, n.s.)による違いは見られなかった。

3 考察

母親の在場面と不在場面の全体的な傾向を見ると、第1因子「否定的な関わりかけ」、第2因子「向社会的関わりかけ」ともに母親在場面で抑制されているように見えたが、有意ではなかった。ただし、第2因子についての統計量は、片側検定すなわち、“母親在場面に比べて、母親不在場面において「向社会的な関わりかけ」が少ない”と仮説を設定した場合には有意となる値であり、今回の分析で用いたデータ数で差が明確になるほどの違いではないが、実際にそういった差はあるという可能性がある。データ数を増やして見直すことにより明確になるであろう。

年齢と年齢差については第1因子「否定的な関わりかけ」については特別な傾向は認められなかった。しかし、第2因子「向社会的関わりかけ」については、1歳から2歳程度では、母親の在・不在はきょうだい関係にほとんど影響を与えていないのに対して、年齢が高くなるにつれて個人差が大きくなること、ただし、年齢が高くなるにつれて、母親在場面の場合に「向社会的関わりかけ」が増えるのか、母親不在場面の場合に「向社会的関わりかけ」が増えるのかは個人ごとに異なることが示された。

本研究は探索的に分析を進めたので、将来の研究でこうした点を検証する必要がある。今後の検証が必要ということ的前提に本研究で明らかにされたことおよび示唆されることをまとめると、年齢が増加するにしたがって母親の在・不在の影響は次第に強くなっていくが母親の在・不在の影響が肯定的に働くか、否定的に働くかは個人による。先行研究と本研究の結果を合わせて考えると、在・不在の影響が肯定的に働くか、否定的に働くかの影響は年齢、年齢差、性差ときょうだい構成が互いに影響を与えあっている。また、個々の要因についても、きょうだいの年齢差があまりないとき、あるいは非常に離れている場合はきょうだいは母親不在場面で「向社会的関わりかけ」が多くなり、年齢の差が3.0~4.5歳の間である場合は母親在場面で「向社会的関わりかけ」が多くなるというように、1つの要因内でも直線的な影響はみられず、要因内での各水準について個別に検討する必要があると言える。

本研究では母親在場面の影響を見るため、母親にはできるだけきょうだいに関わりかけないよう依頼して分析をおこなった。しかし、先行研究の多くは母親がどのように関わりかけていくかを目的としている。このことから、母親が存在していることにより、きょうだい間の関わりかけがどのように変化するのかという問題と、

母親がきょうだいにどのように関わりかけていき、その結果きょうだい関係がどのように変化するのは別の問題であることが示唆される。

全体として、性別と年齢構成による明らかな差はないと考えられる。また、年齢についても年齢が高くなるにしたがってどうなるという直線的な傾向は見られない。もちろん、先行研究が間違っているのではなく、「向社会的関わりかけ」において見られたように、年齢段階をより小さく区切っていけばそれぞれの年齢段階では差がみられると予想される。今後の分析ではより多くのデータをとるか、あるいは特定の年齢段階に限定してより細かな分析ができる体制にして分析を進める必要がある。例えば、幼児期とか学童期のみ焦点を絞り、きょうだい構成も同性同士の場合、姉弟、兄妹の場合など特定の条件に絞った研究を行いそれぞれの研究をつきあわせるという方向が考えられる。

謝辞

本研究は比較発達心理学研究分野における共通テーマである「乳幼児の社会的発達の行動学的研究」に基づき、企画、立案、実施された諸研究の一部として行われた大阪大学人間科学部平成 15 年度卒業論文「きょうだいの相互交渉に及ぼす母親の在・不在の影響」（北川昌英）のデータを再検討し、分析し直したものである。本研究の遂行にあたり、多大な協力をいただいた研究室スタッフと学生諸君に感謝します。また、本研究にご協力いただいた 17 組のごきょうだいとそのお母様方に感謝の意を表します。

引用文献

- Abramovitch, R., Corter, C., & Lando, B. 1979 Sibling interaction in the home. *Child Development*, **50**, 997-1003.
- Abramovitch, R., Corter, C., & Pepler, D. J. 1980 Observations of mixed-sex sibling dyads. *Child Development*, **51**, 1268-1271.
- Abramovitch, R., Corter, C., Pepler, D. J., & Stanhope, L. 1986 Sibling and peer interaction: A final follow-up and a comparison. *Child Development*, **57**, 217-229.
- Berndt, T. J., & Bulleit, T. N. 1985 Effects of sibling relationships on preschooler's behavior at home and at school. *Developmental Psychology*, **21**, 761-767.
- Bigner, J. J. 1974 Second borns' discrimination of sibling role concepts. *Developmental Psychology*, **10**, 564-573.
- Brody, G. H., Stoneman, Z., & MacKinnon, C. E. 1982 Role asymmetries in interactions among school-aged children, their younger siblings, and their friends. *Child Development*, **53**, 1364-1370.
- Brody, G. H., Stoneman, Z., MacKinnon, C. E., MacKinnon, R. 1985 Role relationships

- and behavior between preschool-aged and school-aged sibling pairs. *Developmental Psychology*, **21**, 124-129.
- Cicirelli, V. G. 1972 The effect of sibling relationship on concept learning of young children taught by child-teachers. *Child Development*, **43**, 282-287.
- Cicirelli, V. G. 1976 Mother-child and sibling-sibling interactions on a problem-solving task. *Child Development*, **47**, 588-596.
- Corter, C., Abramovitch, R., & Pepler, D. J. 1983 The role of the mother in sibling interaction. *Child Development*, **54**, 1599-1605.
- Corter, C., Pepler, D., & Abramovitch, R. 1982 The effects of situation and sibling status on sibling interaction. *Canadian Journal of Behavioural Science*, **14**, 380-392.
- Dubrow, L. V., & Howe, N. 1999 Parental play styles and sibling interaction during a problem-solving task. *Infant and Child Development*, **8**, 101-115.
- Farver, J. A. M., & Wimbarti, S. 1995 Indonesian children's play with their mothers and older siblings. *Child Development*, **66**, 1493-1503.
- Furman, W., & Buhrmester, D. 1985 Children's perceptions of the qualities of sibling relationships. *Child Development*, **56**, 448-461.
- 日野林俊彦 1995 発達 白樫三四郎(編著) 現代心理学への招待 ミネルバ書房 Pp. 139-156.
- Hoff-Ginsberg, E., & Krueger, W. M. 1991 Older sibling as conversational partners. *Merrill-Palmer Quarterly*, **37**, 465-482.
- Howe, N., Aquan-Assee, J., & Bukowski, W. M. 2001 Predicting sibling relations over time: Synchrony between maternal management styles and sibling relationship quality. *Merrill-Palmer Quarterly*, **47**, 121-141.
- Howe, N., Bukowski, W. M., & Aquan-Assee, J. 1997 The dynamics of reciprocal sibling interaction: Are context and maternal behaviour important? *Canadian Journal of Behavioural Science*, **29**, 92-100.
- Jones, C. P., & Adamson, L. B. 1987 Language use in mother-child and mother-child-sibling interactions. *Child Development*, **58**, 356-366.
- 北川昌英 2004 きょうだいの相互交渉に及ぼす母親の在・不在の影響 平成 15 年度大阪大学人間科学部卒業論文(未公刊)
- 小島康生 1996 乳幼児期のきょうだい関係に関する行動発達研究 - 調整者としての母親の役割を中心に - 平成 8 年度大阪大学人間科学部博士学術論文(未公刊)
- Kojima, Y. 2000 Maternal regulation of sibling interactions in the preschool years: Observational study in Japanese families. *Child Development*, **71**, 1640-1647.
- Lamb, M. E. 1978a Interactions between eighteen-month-olds and their preschool-aged

- siblings. *Child Development*, **49**, 51-19.
- Lamb, M. E. 1978b The development of sibling relationships in infancy: A short-term longitudinal study. *Child Development*, **49**, 1189-1196.
- マーティン P.・ベイトソン P. 粕谷英一・近 雅博・細馬宏通(訳) 1990 行動研究入門 - 動物行動の観察から解析まで 東海大出版会
(Martin, P.・Bateson, P. 1985 *Measuring behaviour*. Cambridge: Cambridge University Press.)
- Minnett, A. M., Vandell, D. L., & Santrock, J. W. 1983 The effects of sibling status on sibling interaction: Influence of birth order, age, spacing, sex of child, and sex of sibling. *Child Development*, **54**, 1064-1072.
- Musun-Miller, L. 1991 Effects of maternal presence on sibling behavior. *Journal of Applied Development Psychology*, **12**, 145-157.
- Pepler, D. J., Abramovitch, R., & Corter, C. 1981 Sibling interaction in the home: A longitudinal study. *Child Development*, **52**, 1344-1347.
- Stewart, R. B. 1983 Sibling attachment relationships: Child-infant interactions in the strange situation. *Developmental Psychology*, **19**, 192-199.
- Stewart, R. B., & Marvin, R. S. 1984 Sibling relations: The role of conceptual perspective-taking in the ontogeny of sibling caregiving. *Child Development*, **55**, 1322-1332.
- Stoneman, Z., Brody, G. H., & MacKinnon, C. E. 1986 Same-sex and cross-sex sibling: Activity choices, roles, behavior, and gender stereotypes. *Sex Roles*, **15**, 495-511.
- Vandell, D. L., & Wilson, K. S. 1987 Infants' interactions with mother, sibling, and peer: Contrasts and relations between interaction systems. *Child Development*, **58**, 176-186.

Exploratory research of the effects of the mother's presence on sibling interactions

Yasuhiro SHIZAWA, Jun YASUDA, Toshihiko HINOYASHI, and Tetsuhiro MINAMI

Considerable research has investigated the effects of the mother's presence on sibling interactions; however, the findings remain controversial. One opinion is that a mother's presence has a positive effect on sibling interactions; that is, siblings show positive and pro-social behavior, while rejecting negative behavior in the mother's presence. However, other researchers consider that siblings reject positive and pro-social behavior, and show increased negative behavior in the mother's presence. It has been suggested that these discrepancies are caused by the differences age, sex, and a combination of these factors among examined siblings. Previous research that systematically investigated the effects of those factors on the behavior of siblings in the mother's presence could not identify any effects. Based on these findings, it is considered that those factors do not have a linear effect on sibling interaction in their mother's presence; therefore, we explored the effects of those factors on sibling interaction in their mother's presence. We found that the effect on pro-social behavior in their mother's presence increased when the sibling age increased; however, whether the effect was positive or negative differed among individuals. The age difference among siblings affected on their interaction but the effect was not linear; that is when siblings are 3.0 to 4.5 years old, their pro-social behavior is promoted when the mother is presence, whereas when the children are less than 3.0 years old or more than 4.5 years old, their pro-social behavior is promoted when their mother is absent.